

県民会館の整備のあり方に関する検討と仙台市音楽ホール検討との比較

No.	項目	宮城県（第1回～第3回有識者会議における議論）	仙台市（出典：仙台市音楽ホール検討懇話会 報告書）
1	ホール需要等	<ul style="list-style-type: none"> ・県内にはポピュラー音楽や商業系のミュージカル等に適した施設が不足。東北地方全体の需要を考慮して地域の要となる新たなホール施設が必要 ・ホールに対する需要は多く、ライブを通じた交流人口が今後も増えていくと見られる ・仙台には演劇活動ができる場所が少ない ・県民が小ホールで自作してみることも刺激になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・全国的に巡回するツアー公演等において、仙台は東北のみならず全国の拠点都市と位置づけされる。地域の文化芸術活動を支えるとともに、このような広域からの集客、交流拠点となる施設が求められる ・震災復興過程に大きな力を果たした文化芸術の力を発展させ、「楽都仙台」をさらに厚みと広がりのあるものにしていく拠点が求められている ・クラシック音楽に代表される生の音源の大規模な演奏においても繊細で豊かな響きを有する、優れた音響性能を持つホールが求められているとともに、ポップスなど多様な音楽、オペラ、バレエ、ダンス・舞踊、ミュージカルなど総合舞台芸術、その他映像などを駆使した多様な表現活動などを適切に行うことができるホールが求められている ・これまで実現できなかった文化芸術に関する全国大会、国際的大会などが適切に開催できる施設が求められている
2	ホール機能	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホールは、ポピュラー音楽などを東北の拠点としてホストできるような機能を備えた、貸館中心に徹した方がよい。一方で、基礎自治体設置のホールなどのハブになるための機能を、中・小ホールを通じて持つ必要あり ・中・小ホールには、ある程度の自主制作機能を持つスペースを確保する必要あり ・舞台設備は可能な限り大は小を兼ねるというようにしておくことが、可能性を広げる点で重要 ・新たな県民会館を整備する際には、音響反射板が必要 ・最初から小・中ホールの規模や機能を議論するのではなく、県内基礎自治体が何を求めている、どのようなサポートをする必要があるのかを決めて、その後に必要なハードを割り出していくという発想を持つべき 	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホールは2千席規模の生の音源に対する音響を重視した高機能多機能ホールとする ・可動式音響反射板の導入により、合唱付大編成オーケストラにも対応できるコンサートホール形式と、多様な演出を可能とする劇場形式に転換ができるホールとする ・最新の知見と技術により、生の音源の響きを活かすコンサートホールと、視認性に優れて言葉が明瞭に聞こえる劇場の2つの特性を最大限実現するホールの計画が可能である
3	整備の方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・2千席のホールを現地でつくるのは困難。他の場所で作るのであれば、2千席規模のホールだけでなく、複合的な機能を考えていく必要あり ・創造、普及など文化政策上ホール施設に求められている機能かつ商業的な要求にも応えられるホール ・人材育成など市町村への支援機能を持つ施設 ・県の歳入を増やすような会館づくり ・貸館中心の大ホールである程度収入を得ながら、持ち出しの事業として県内の人材育成などに努めるという両方の機能を持つ施設 ・すぐに老朽化せずにきちんと更新もできて、100年先まで残るホールをつくり、東北一、日本一のホールくらいのインパクトを持ったホールをつくるべき ・クラシックやオペラなどそれぞれに適切な環境があるので、必要な部分を見極めていくことが大事 	<ul style="list-style-type: none"> ・「誰もが集い、交流する、広場としての文化施設」という理念に基づき、「（1）市民に支えられた楽都をさらに高める」「（2）文化芸術を介したまちづくりを進める」「（3）復興の力となった文化力を社会に活かす」の3つを設置目的とする ・理念・目的を実現するため、「①公演・鑑賞・発表機能」「②創造・創作・練習機能」「③文化力発揮機能」「④まちづくり機能」「⑤交流機能」「⑥人材育成機能」の6つの機能を持つ ・将来負担が過大とならないこと、表現のあり方や技術の変化に柔軟に対応できること、立地するまちとの親和性などの視点を重視する

No.	項目	宮城県（第1回～第3回有識者会議における議論）	仙台市（出典：仙台市音楽ホール検討懇話会 報告書）
4	ホールの規模	<ul style="list-style-type: none"> ・ホールの規模，キャパシティが多いほど集客力につながる ・施設の規模・大きさが何のために必要なかを明確にすべき ・メインのホールを2千席規模として，小ホールも併設 ・同じフロアの中に必要な機能が備わっているなど，基本条件がしっかりしていること ・大中小といったサイズの多様性は大事にすべき ・東北一の規模 ・歳入・歳出がどうなのかという観点から規模を考えるべき ・楽屋から袖まで一直線で行けるようなスペースを確保できる面積を持ったホール ・外来の招聘のオペラやバレエなどを公演するのであれば，3千席や4千席の方がビジネスになることもあり得る ・県民が自分達で使えるホールというの必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホール（2千席規模の生の音源に対する音響重視の高機能多機能ホール） →7,500㎡程度 ・小ホール（300～500席程度の，多様な表現活動に対応できる多機能ホール） →1,400～1,600㎡程度 ・音楽リハーサル室 → 450㎡程度 ・舞台芸術リハーサル室 → 500㎡程度 ・稽古場・練習室群 → 520～570㎡程度 ・製作工房，録音スタジオ，倉庫など → 230～380㎡程度 ・広場・交流スペース → 2,750～4,050㎡程度 ・施設管理運営諸室等 → 1,550～1,750㎡程度 ・その他共通動線等 → 12,100～13,200㎡程度 計 27,000～30,000㎡程度
5	広域性	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の境界を取り払った形での事業展開が必要 ・国内外からの集客効果を意識すべき 	<ul style="list-style-type: none"> ・広域，国内外からの来街者，観光客が訪れる場 ・交流人口拡大，来街者消費行動等から経済的波及効果を高めるとともに，新しい価値を創出 ・都市の魅力向上，まちの楽しみ方を増やし，国内外への発信力の向上につなげる
6	開放性	<ul style="list-style-type: none"> ・市民の多くの人たちに開かれた場所 ・ホールのある場所として，佇んだり会話したりといった広がりがある街の中で持続性を持っていること ・コンサートがない時でも人が集まるような機能 ・人が集まるという場としてホールを活用する ・県民が繰り返し施設を楽しめるよう，物産館などを備えた施設 	<ul style="list-style-type: none"> ・誰もが日常的に集い，憩い，賑わう場 ・文化芸術を介し，市民や文化団体の交流の場 ・広域的な都市文化観光の拠点，集客・交流の拠点 ・まちの他の魅力と連携した，回遊拠点
7	地域連携・人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ・市町村のホール施設を担う人材育成の場としての機能 ・教育普及を目的とした専門的スタッフの配置 ・市町村の間における県民会館を活用したネットワークのハブ機能 ・実演芸術を担う人材を育てて社会に送り出す機能 ・基礎自治体のホールのハブになる機能 ・基礎自治体のホールで行うべきことをできるような専門人材を育てる機能 ・県でしかできないハードやソフトを充実させ，そこからいい人材を輩出し，また戻ってきて宮城県にお客様を呼び込めるような施設になることが望ましい 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設内外での事業展開，文化芸術によるエリアマネジメント展開により，新たなまちの魅力の形成を図り，まちの回遊性を高める ・復興の力となった文化力を継承・発展させ，教育・医療・福祉・コミュニティ・産業などとの連携を図り，地域社会の課題解決，社会包摂の実現，共生社会の実現につなげる ・実演芸術振興，総合的な文化芸術政策展開に係る様々な人材，文化力を社会に活かしていくための人材の育成を図る ・専門人材だけでなく，市民，企業，福祉施設や病院，学校等での活動者，ボランティアなど多様な人材の支援・育成を図る
8	役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・複数のホールで機能分散を図り，それぞれのホールが持つ機能を高め，県全体として構成する ・県と仙台市の間で役割分担を図ることが必要 ・それぞれのホールが活かされる形，うまく棲み分けできるような形を探り，それぞれが何をやるのかをこれから具体的に考えていかなければならない ・仙台市がクラシック音楽のようなハイアート中心的なものだとすれば，県はポピュラー音楽や商業的なミュージカルができ，東北中から人が集まる拠点をつくることに重要性がある ・県内基礎自治体を支援する機能は県が担うべき ・仙台市はクラシック音楽重視型のホールで，県民会館はあらゆるエンターテイメントに対応する劇場型になる。音楽ホール系は客席のスロープが緩やかであり，劇場型は客席が割と急斜面であるというように特性が自ずと出てくるため，同じキャパシティーでも全然違うホールになる ・まだできていないホールに対して棲み分け論をあまり詰めすぎても仕方がない 	-
9	技術革新対応	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台設備上で使える技術・テクノロジーの変化に対応できるホール ・テクノロジーの進化に対応していくことを前提としたホール整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホールは適切な舞台及び舞台設備，バックヤード，観客用施設などを最新の知見に応じて適切に計画するとともに，映像・メディアなど表現に係る技術の革新などに対応できる設備を有する

No.	項目	宮城県（第1回～第3回有識者会議における議論）	仙台市（出典：仙台市音楽ホール検討懇話会 報告書）
10	立地	<ul style="list-style-type: none"> ・現地で、必要なキャパシティーや機能を盛り込もうとすると、相当厳しい ・現県民会館は老朽化が著しく、これに手をかけお金をかけてというのは、有効ではない ・座席が狭く、バックヤードを考慮すると、現在の敷地に2千席規模のホールは物理的に困難 ・現県民会館はせんたいメディアテーク等の文化的な機能との連続性ができつつある。移転しても公園やスポーツ施設等と機能的につながることが求められる ・現地で高層化した施設を建設する場合、下から上に運ぶ動線が必要。そのための設備にかなりの体積、面積を要する ・2千席規模のホールだと、幕間に休憩で席を離れる人が半分だとして、それを受け止められるような空間をつくるには、現地では狭すぎる ・火災等の有事の際に観客等が逃げられる空間を確保することも必要。現在の敷地ではその空間の確保が困難 ・観光需要と結びついた立地が必要であり、集客性のある場所を前提に立地を検討すべき ・交通の利便性が高い所がよい ・公共交通機関のない遠方に立地する場合は駐車場が必要。キャパシティーの7割程度が望ましい ・公共交通機関で人を流動させることができる場所を視野に入れるべき ・人が集中するといった問題をクリアできるのであれば、仙台駅に近く県外からのお客様も来やすいので、仙台医療センター跡地が理想的な場所である ・県をつくるホールが、東北地方の一つの拠点であることや県内基礎自治体ホールのハブ機能を持つことを考慮すると、公演がない時でも人が来るような場である必要がある ・仙台医療センター跡地は駅に近いということだけでなく、近隣商業地域であるという点においても大きなメリットになる 	<ul style="list-style-type: none"> ①青葉山交流広場 ②青葉山公園 ③西公園（市民プール跡） ④西公園（市民図書館跡） ⑤西公園（お花見広場） ⑥勾当台公園（東側：いこいのゾーン） ⑦錦町公園 ⑧民有地（再開発） ⑨民有地（購入）